

そうだったのか！ 資産運用の必要性



どうして今 資産運用が騒がれているのか？

本誌 25 号（2022 年夏の号）でもご紹介した「資産運用」。

政府も資産倍増計画として iDeCo や NISA などの施策を行ったり、学校の授業に資産運用を組み込んだりしています。確かに資産が増えることは嬉しいし、正直、年金だってこの先どうなるかわからない。でも、ホントに銀行でコツコツ貯めていくだけではダメなの？

知らない間に 資産は減っている？！

続く円安で物価が上がってきているのは周知のこと。今年はなんと2万品目以上の値上げがされています。

これだけ多くの値上げがされると、さすがにニュースにもなり、わたし達も意識をします。

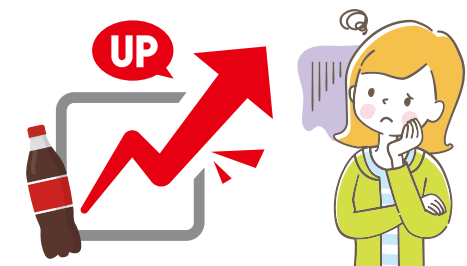
でも、当然ながら値上げは今年に始まったわけではないのです。

給与が上がれば人件費も上がり、連動してコストも上がるのは当然。それは日本だけでなく海外も同じです。材料も手間も全てのコストが上がるため、物価も上がってくるわけです。これまで、物価上昇についてそこまで大きく取り上げられなかったのは、給与水準と物価の上昇率が比較的同じくらいであったからなのです。

ただ、企業努力によってなんとか上昇率を抑えられていた物価も、ここにきてやはり限界となり大々的にニュースになるほどに多くのものが上昇したわけです。

例えば、自動販売機で売られているコーラ。今から約40年前の1983年には100円で売られていました。

消費税が89年に導入されても価格は据え置かれたものの、92年には原材料費高騰で110円に値上げ。さらに97年の消費税増税の翌年には120円に。2014年の消費税増税では130円。ここ最近では160円。そして10月出荷以降はさらに値上げされ、180円にもなると噂されています。



コーラを例にとると40年前から物価は80%も上昇していて、40年前から大切に取って置いた100円では、もうコーラは買うことはできず、友達の分もと思って取っておいた100円を足しても、今となってはぎりぎり1本しか買えないわけです。それはお金の価値が下がっているのと同じこと。今回の例では、45%減。つまり、当時の1000万円が今の550万円相当の価値しかなくなっているということなのです。資産（現金）をそのまま持ち続けているだけでは、使わなくても減ってしまっている、というわけなのです。

ただ貯めるだけでは 間に合わない

昭和の時代、銀行金利は年利約6%。

ただ預けているだけで、時間が経てば資産は増えていきました。

でも、今の銀行金利は0.001%。これでは人生全てかけてもほとんど増えず、物価上昇によってどんどん価値が減っていく一方なのです。

「老後2000万円」と言われるけれども、老後と呼ばれる年齢になるまであと何年ありますか？

その歳まで近い方は、2000万円が間に合うのか、遠い方は実際2000万円貯めたとして、物価上昇で結局2000万円では足りなくなるのか、そんな心配がありますよね。

だからこそ資産運用

老後になぜ2000万円必要なのか。「老後」と呼ばれる時点で一度に2000万円必要なわけではありません。

「老後」と呼ばれる期間は年金以外ほとんど収入がないため、しっかり生活していくためにも準備しておきましょう。という意味なのです。

つまり、その期間中に継続して資産があれば、その時点で全額準備ができなくても何の問題もないわけです。そして、運用を続けていけば物価が上昇してもそれに対応することができるわけです。

そして、資産運用は「老後」期間に限った話ではありません。子どもの教育資金、住宅ローンといった「人生三大資金」と呼ばれるものにも当然ながら助けになるわけです。

資産運用は期間が大事

資産運用とは、お金を預貯金に眠らせたままにしておくのではなく、そのお金を元手にして増やすこと。自分のお金に働いてもらうことなのです。

代表的なものにiDeCoやNISAなどの投資信託で運用するものがあります。

前にもお伝えしましたが、資産運用は時間（期間）を長くかけることで効果を発揮します。いつまでにどのくらい資産が必要なのかはそれぞれ違い、またそれぞれにあった運用方法があります。

まずは現状を知り、すぐに行動に移すことで気持ちに余裕を持った生活を送りたいですね。

みぞぐち商会でもiDeCoや変額保険という投資信託運用の商品を多数取り扱っております。また、運用しながら三大疾病の保障や死亡保障をつけられるものもあります。将来の資産形成に向けた相談も承っておりますので、これを機に「お金が減らない将来」を作っていきましょう！



もりあやこの

この人に会いたい！

第26回

小川弓美子（おがわ ゆみこ）さん



特別な力でなくていい、生き抜く力を育てたい

みぞぐち商会はいま、昭和学院短期大学の産学連携プロジェクトに参加しています。学生さんが興味を持っていることを学び、企画・発表する授業のアドバイスやサポートがおもな役割で、わたしたちが担当するグループのテーマは「投資」。教室やオンラインなどでたくさんのお話をしています。興味を持って話を聞いてくれるので、とても楽しくてやりがいがあります。今回は、そのプロジェクト担当教員の小川さんにお話をうかがいました。

●最初はリクルートグループの 派遣会社に就職

当時成長業界で、会社説明会の雰囲気が快活だったので入社を決めました。

任される仕事も本人の志向を尊重し評価も男女の差がなく、結果をきちんと認めて評価してくれる会社でした。

●仕事に乗っていた入社2年目に産休

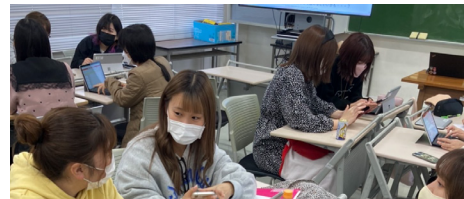
子どもが生まれてからは産休を取得し、一時的に仕事を離れますがまだ勤務2年目ということもありこのまま辞めるのはもったいない、と思い復職しました。復帰後も以前と同様のポジションで仕事をし、公平に評価をしてくれました。「働く」ことで得られる充実感を感じることができました。また、ちょうどそのころ会社に子育てや介護など時間に制約がある中で働く人のための時短勤務制度ができ、政府方針で保育園も増加し、働く母親にとって追い風になりました。

とはいえ、子どもは発熱もしますし、突発的に休まざるを得ないこともおき、仕事の調整を急遽しなければいけないことも多くありました。

初めての経験の為わからないことも多く、仕事も育児も想定通りいかないこともたくさん経験しました。しかし、周囲の方の助けの中で、自分がやるべきことは何かを見つめ直す貴重な機会をいただくことができたと思っています。

●メンバーを抱えるポジションに昇進

壁にぶつかりながらも、仕事を継続したことで管理職に昇進することができました。マネー



From
もりあやこ

「社会に立ち向かえる能力を身につけ、多面的な見方で、特別な力でなくていい、生き抜く力を育てたい」と語る小川さんにたいへん心を打たれました。わたしたちもできるかぎり協力して、学生さんたちの社会に出てからの力を育てられればと思いました。

ジャーとプレイヤーという違いの中で、自分だけで処理ができないことも多く苦勞も多々ありました。

管理職としての判断や計画を求められていく中で、新たな悩みに頭を抱えることもありましたが、「もう少し頑張ってみよう」という思いのなかで仕事を継続する選択をしてきました。

一方で「やるからには成果を上げたい」「自分がやっている価値を見出したい」という思いも芽生えてきました。

●ターニングポイントとなった新規部署

そんななか、とても大きなターニングポイントになった部署があります。

それは、障がいをお持ちの方に仕事を紹介する部署でした。特に精神障がいといううつ病などの方の社会復帰や就職の支援を主に実施していました。社会福祉的な意義もありましたが、わたしはそれを「人助け」ではなく「ビジネス」として取り組もうと決めました。精神論だけでは事業は続きません。紹介される方のためにも、彼らを受け入れる先である企業・紹介元となる自企業のためにも「事業としての継続」が重要だと考えていたからです。メンバーと日々、お客様の要望や障がい者の方のためにどのような事業内容や運営方法がいいのかを議論を重ね、ビジネスの枠組みを作っていったと思います。組織で丸になって、より良いサービスを考えたい中で管理職としての後継者の育成もできました。

一通りやりきったと思える仕事をしてきたという実感の中、次の自分はどうかと考えたとき、私は「教育について考えたい」と思ったのです。

事業を通じて出会った精神障がいの方で社会復帰を希望する方は学力レベルが優秀な方も多く、勉強も頑張って、いわゆる高学歴という人生を歩んできたかたもいらっしゃいました。仕事を通じて、障がいを発症するケースのお話



を聞いていく中で、「勉強って何のためなんだろう」「日本の教育って生きていくのに役立つたないのでは」、そんな疑問が頭をもたげ、グループ会社の教育関連部門に転籍することに決めました。

●自分が先生に！？

新しい仕事は、取引先の大学・専門学校などと一緒に学生を募集するための施策を行う仕事内容でした。募集効果のあるカリキュラムを考えたり、募集におけるデータを分析したりと今までにはなかった要素を求められ、日々学びながら仕事を持ち帰って夜遅くまで資料を作ることもありました。成長実感はある一方で、体力的に続けられるか悩んでいたところに、担当していた昭和学院短期大学から「先生をやらないか」と声をかけていただいたのです。

教員免許も持たない自分に務まるのかと、何度も学校側と話し合った結果、転職を決めました。

語学など一般科目もふくめて教科は幅広く担当していますが、「学校をよくしたい」「学生たちがどんな壁にぶつかってもしなやかに立ち上がれる力をつけてもらいたい」という一心で日々を過ごしています。

以前は数値目標などの達成がやりがいでしたが、今は目の前にいる子どもたちのサポートができること、その人生に関われることがやりがいです。学生が難題にぶつかりながらも、頑張っている姿に自分自身も元氣や勇氣をもらっています。

小川弓美子（おがわ ゆみこ）

昭和学院短期大学 人間生活学科 助教。担当科目はキャリアデザイン論、ビジネス実務など。共著論文に「産学連携プログラムの教育効果」（2022年）などがある。小3～21歳 4人の母